
遠隔会議システムを利用した 対面授業・遠隔授業の実施と考察

——2020-2021年度の初年次教育の取り組みから——

宮下十有

木田勇輔

1. はじめに

1.1. 研究背景

2019年末から世界的に広がった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により、2020年度から、日本国内の大学と同様、相山女学園大学においても新型コロナウイルス感染症の感染対策として、遠隔授業を実施することとなった。その後、感染状況に対応しながら、2020年後期より、緊急事態宣言下においては遠隔授業、感染状況が緩やかな場合は対面で授業が実施されている。

大学教育における初年次教育とは、2008年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」により、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と定義づけられている。平成28(2016)年の高大接続システム改革会議の最終答申にも示されており、「主体性を持って、多様な人々と学び、働くことのできる力を育む」上で「多様な背景を持つ学生を大学教育に円滑に移行させるための「初年次教育」の充実」を図ることが求められている。大学での学修を進める上でのスタディスキル、アカデミックスキルの習得

を目指し、文化情報学部メディア情報学科(以降本学科)では、初年次前期に「ファーストイヤーゼミ」、後期に「基礎演習」の授業が必修授業として設けられている。

2020年から2021年、日本国内の多くの大学がオンライン授業への対応を迫られることになった。各大学の教育活動における授業運営に関する実践的な研究がなされ、経験知として蓄積されることになった。西出ら(2021)は、本論でも扱う初年次前期科目「ファーストイヤーゼミ」の遠隔対応にあったって教材共有の取り組みの経緯と実際をアンケートに基づいた検証した研究や藤原ら(2020)による受講学生の基礎調査に基づくオンライン授業のあり方について、教員の負担軽減、受講環境の整備、新入生へのコミュニケーションの場を設置する等の配慮、将来の人材育成を担う大学のあり方として基本的なカリキュラムの変更や他大学との連携の提言なされている。村田ら(2021)も初年次教育の授業である「新入生セミナーA」の授業マネジメントと共通コンテンツの制作者の視点から課題について、教材コンテンツの提供とその際掲示・再配布にかかる問題の指摘、および、Afterコロナを見据えて、教員側のLMS、オンラインコミュニケーションツールの理解の深化と、教員の能力開発の必要性を提示している。

2020年度前期におけるコロナ禍での本学科の初年次教育とそこをベースとした学生サポートに

関して、亀井ら（2021）の研究で検証されている。とくに新入生への支援が必要だった2020年4月から7月にかけての学生支援における、授業期間前の教員・同級生とのチャットの役割の分析と評価、および授業開始後のオンライン上で上級生とのZoomのブレイクアウトルームをつかった交流と支援のあり方の分析・評価、検討している。先の見えない状況下で、新入生同士、さらに新入生と上級生との対話が主体的な学びに向かわせる方策や支援が見出された。今後の課題として、コロナ禍の状況に限定されず、コミュニケーションツールを活用すること。また、ここで得た経験から、コミュニケーションツールを活用して同学年および上級生との学生同士の対話により、学びを促す方法と効果を検証して行くことの重要性が論じられている。

本論が対象とする文科省の令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等でも明らかにされたように、半分以上を対面授業と予定した大学等は1064校中1036校（約97.4%）を占めていた（文部科学省 2021）。

本学科において、2020年度後期以降での授業では、面授授業（本学発行の文書においては「対面授業」と表記される）と、遠隔授業とを繰り返しながら、2021年度までの授業を行なっている。

1.2. 本論文の目的と方法

本論文では、2020年度および2021年度の文化情報学部メディア情報学科（以降、本学科）で初年次教育として実施する1年次前期必修科目「ファーストイヤーゼミ」（教養教育科目）および1年次後期必修科目「基礎演習」（専門科目）における対面授業・遠隔授業においても活用している遠隔会議システムを利用の検討と課題を明らかにし、今後の授業のあり方を考察するものである。

実際の授業の概要と授業の実施方法を概観し、その中で活用された遠隔会議システムの利用方法をまとめる。当初の目的と、システムを導入する

ことによるメリット、デメリットを整理する。遠隔会議システムを利用した授業実施方法についてのハード、ソフトそれぞれの課題と利用時のより良い環境の提案、またLMSなどの学習システムと併用した場合の授業のあり方について考察する。

実践者側の状況とともに、実際の学生のアンケート評価、授業時のコメントから参加した学生の授業充実度を測り、検証を行う。

2. 2020年度前期の初年次教育

2.1. 2020年度前期の状況

2019年終わり頃に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19：coronavirus disease 2019の略語）は、世界中に感染拡大をした。本稿執筆時の2021年10月現在、ようやく第5波が収束を迎えたが、日常のあらゆる場面で対応が求められている。

ここで2020年度末から2021年度初頭の動きを振り返りたい。大学教育の現場では、2019年度の授業はほぼ終了していたものの、学校教育の現場では、2020年2月27日、安倍総理（当時）による「全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週3月2日から春休みまで、臨時休業の要請であった。これを受け、2019年度卒業式を実施できず、郵送で卒業証書を配布し、本学科の教員によるメッセージ動画で卒業生へのメッセージを送るものとなった。

国の新型インフルエンザ等対策特別措置法（平成24年法律第31号）第32条第1項の規定に基づき、2020年4月7日新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令、愛知県では、4月10日に「愛知県緊急事態宣言」を発出した。4月16日に愛知県が国から「特定警戒都道府県」に指定された。これ以前に大学では、4月3日の入学式を中止し、3月23日時点で前期の開始を4月20日に変更、さらにその後の感染拡大を受け、GW明けの5月11

日に前期授業が開始された。

文科省による2020年5月12日時点のデータにおいて、「多様なメディアの高度な利用などを通じて、教室外の学生に対して行う授業(遠隔授業)の活用については、ほぼ全て(96.6%)の大学等で実施又は検討する方針(文部科学省 2020a)となっていた。

1回目の緊急事態宣言は、5月25日までで終了したが、遠隔授業はその後にも継続し、最終回である8月6日の最終授業は対面授業を計画していたが、大学内での感染状況に対応して、断念せざるを得なくなり、全ての授業がオンラインでの実施になった。

2.2. 2020年度前期におけるファーストイヤーゼミの実施

2020年度前期の「ファーストイヤーゼミ」の授業自体は全て遠隔授業で実施することとなった。一部授業はオンディマンド形式の授業を用いたが、大半をリアルタイム双方向型の授業で実施した。学生は大学では受講せず、自宅などそれぞれの通信可能な環境から接続し、授業に参加していた。

少人数複数クラスでの同時開講の授業であるため、従来の面接授業においては、共通教材を担当教員がそれぞれ分担して準備し、合同授業と個別クラスでの実施を組み合わせた授業構成となっていた。2020年度前期の遠隔授業での実施にあたり、担当者ごと担当内容を分担し、リアルタイム双方向型授業で実施するか、オンディマンド型での教材提供を行うかを選択して、授業を行った。

1クラスあたりおよそ20名弱の人数で配分されていたこともあり、相互のプレゼンテーションやレポートのピアレビューなどの活動には適したクラスサイズであったと考える。出席やそれぞれの課題についての指導や評価は、教材提供者と各クラス担当に委ねられた。面接授業の際も行われていたように、学生同士、学生と教員の交流を目的

とする、自己紹介やインタビュー活動などのアクティビティは個別クラスでの実施時間を設けた。一方で、クラスでの交流自体は時間が限られており、クラス内での交流がその後の学生生活での人間関係を構築できたかという部分には課題が残った。

2020年度入学生は入学後1ヶ月授業がなく、新入生の今後の大学生活や、学修計画についての不安を少しでも解消するため、「ファーストイヤーゼミ」のラーニングマネジメントシステム(Learning Management System 以降LMS)に長年利用していたWeb Classを採用した。Web Classのタイムライン機能、Wiki機能、掲示板を利用した、本学科1年生のワンストップの情報提供の場として、活用した。具体的には、大学公式サイトの遠隔授業に関するURLや、遠隔授業に対応する際に必要な各種情報、遠隔授業の情報サイト、教科書販売やGoogleアカウントに関する情報、大学から支給された学習支援金の情報など、多岐にわたるものだった。

また授業開始前の2020年4月9日より、新入生有志によるチャットを開始し、学生とのチャット実験を計5回、5月7日まで実施した。これらはログとしてPDFで残し、参加できなかった学生に情報共有ができるよう配慮していた。

2.3. 2020年度前期ファーストイヤーゼミのアンケート結果からの考察

FD活動の一環で行われている授業アンケートにおいては、回答者が65名と6割程度の回答ではあったが、授業の充実度に関しては、回答者の72.3%(47名)が「その通りである」、27.7%(18名)が「どちらかといえばその通りである」との回答を得た。

一方で、コメントには、「様々な情報に追われて困っていたので、まとめて発信していただけた授業があつて助かりました」があった。授業内だけでなく、それ以前からの情報整理が学生に対し

での支援につながったことがわかる。

亀井による学生の調査でも、初年時での先輩との交流が重要であることが指摘されている（亀井 ibid.）。授業アンケートにおいても、とくに先輩との交流について複数のコメントがあった。「この授業を通して、大学生活で不安だったことが少しは解消された」「先輩との交流の機会を何度も設けていただいたことで、これからの学生生活に対して、少しでも不安が解消されました」「先輩の話が聞けてためになった」「先輩の話が聞けたのがとてもよかったです。不安も解消されたし、学修や就職に対してのモチベーションも上がりました」。2020年度以前は、新入生合宿や対面授業形式のファーストイヤーゼミでも先輩との交流を持つ時間は、好評であった。遠隔授業でもこれを実施することで、学生自身のモチベーションの継続や不安解消の一助となることがわかった。

一方で「Google Classroomでないため課題があるかないかなどわかりにくい」「学生の理解力が足りない場合もあるが、提示された情報が少なく、やろうと言われるだけの課題があったので、何をすれば良いのかわからない場合があった」などのコメントもあった。2020年度に遠隔授業が導入される以前から、ファーストイヤーゼミにおいては積極的にLMS（ラーニング・マネジメント・システム）を利用しており、その際Web Classを採用していた。2020年5月から、大学全体でGoogle Classroomの利用が推奨された。Google Classroomの推奨以前からチャット機能の利用や、初年次学生の学生には、情報を一元化、複数の教員がチームティーチングや複数クラスの授業運営と成績管理をする上での利便性をWeb Classを利用するメリットを説明したが、学生にとっては、全体のシステムが共通化されていた方がわかりやすかったと推測する。また、遠隔授業時の情報提供については、提供する側の教員も、学生の状況に配慮しながら、過不足なく提示することが課題となることもわかった。

3. 2020年度後期の初年次教育

3.1. 2020年度後期の状況

2020年度前期授業を終えた2020年8月6日に、愛知県は県独自の緊急事態宣言を発出した。この宣言は8月24日をもって解除され、愛知県内でも新規感染者が抑制された状態がしばらく続いた。しかし、同年10月後半頃から少しずつ感染者が増え始め、年明けには1日当たりの新規感染者が300名を超える日もあった。2021年1月13日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象区域に愛知県が指定され、同年2月26日までこの宣言が継続した。

2020年度後期の初年次教育である「基礎演習」は、木田勇輔コーディネーターと5名の教員が担当し実施された。2020年度後期には、実習系授業や演習系授業に関しては、教員の申請により対面授業の実施も可能になっていたため、「基礎演習」では完全にオンラインで実施するクラス（4クラス）と一部授業を対面で行うクラス（2クラス）を設置した。クラス分けにあたっては事前にアンケートをし、オンラインクラスを希望した学生に対してはオンラインクラスを割り当て、対面希望ないしはどちらでもよいとした学生を対面クラスに割り当てた。以上のような判断に至ったのは、「初年次教育の目的上対面で行う授業を少しでも増やしたい」と「希望しない学生に対面授業を強制することは避けたい」という二点を考慮したためである。しかしながら、11月に入ると県内での感染者数も増加傾向となり、新たな感染拡大の波が生じることが予想されたため、第9回（2020年11月18日）から最終回（2021年1月6日）まではオンラインで授業を実施した。なお、全ての授業が対面であったわけでないため、大学に通学しながら授業を受講する際の教室も確保されており、大学のPCを利用することも可能となっ

いた。

3.2. 2021年度後期での「基礎演習」での対面・遠隔授業の同時実施

「基礎演習」においては、Microsoft Teamsを主たるLMSとして採用した。学生に一斉メール送信が可能な「ストリーミング」の機能を利用する場合は、Google Classroom内にある前期の「ファースト・イヤーゼミ」のクラスを代用した¹⁾。[図1]



図1 ストリーミング機能を利用した情報発信

「基礎演習」では、キャリア教育に加え、アカデミックスキルとして「レポート作成」「プレゼンテーションの実施」の育成に重点を置いている。例年はレポート作成のためのライブラリー調査やグループワークも実施しているが、これらについてはオンラインで実施可能なプログラムに置き換えた。上記のメニューを全クラスがこなしていけるように、コーディネーターが共通課題を提示しつつ、各クラスでは担当教員が1年生の学びを個別にサポートする形で授業が運営された。前期に行われたオンライン授業では、リアルタイム双方向型の授業で音声的なトラブルが少なからず生じていたため、「基礎演習」では1年生がTeamsというシステムに馴染むための時間を多めに取ることにした。具体的には、通常は1回しか行わない授業の導入を2回に分けて実施した。また、学生が将来的に企業などでTeamsのようなシステムを使用することも十分に想定できるため、Teamsを

「使いこなす」ための取り組み行うことにした。具体的にはTeamsを通じたオフィスファイルの共有機能を用い、文章作成やアンケート、プレゼンテーション資料の作成などのワークを実施した。オンライン授業の実施クラスでは、学生自身が自主的・積極的なコミュニケーションを図るよう、Teamsの会議機能を学生自身が立ち上げることも授業内で行われた。前述の通り、第9回より感染拡大の状況を鑑みた上で対面実施クラスも原則オンラインでの受講に変更となった。[図2]

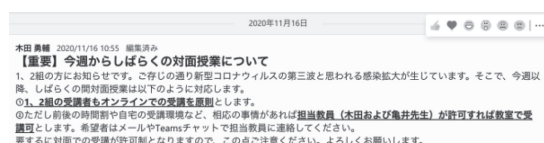


図2 遠隔授業への移行のお知らせ

初年次教育の担当者としては、例年に比べて1年生相互のコミュニケーションの機会が大幅に減少していることを懸念していた。こうした事情もあって、感染の拡大が再び落ち着いた3月を狙って、東山動植物園での研修遠足が企画された。同研修は教員や上級生チューターも参加して2021年3月12日に実施された。

3.3. 2020年度後期基礎演習の実施からみえた成果と課題

「基礎演習」15回の授業後に受講学生に対して振り返りの課題を提示し、1年生110名中104名の有効回答を得た。提示した課題は「学修の取り組みについて」「困ったことや不安」「今後の目標」「春休みに取り組みたいこと」の4つであり、いずれも100～200字程度で答えるように指示した。また、任意の項目として「学修に関する疑問や不安」「担当教員へのメッセージ」を設けた。

図3は「学修の取り組み」に関するテキストデータを、計量テキスト分析の専用ソフトであるKH Coderを用いて分析したものであり、単語が共通

して使用される関係を示す共起ネットワークのグラフである。トピックには「授業の主たる内容に関わるもの」が「学ぶ」を中心としたつながりが見える。また、「大学の学び全般やキャリア教育に関するもの」（「話」「社会」「資格」など）などが見られた。とくに、「レポート」「プレゼン（プレゼンテーション）」に関する文言の多くが、文章を書くこと、発表をすることといった基礎的なアカデミックスキルの形成に関わるものである。学生自身がこれらの学び得たことを意識されていることが見てとれる。

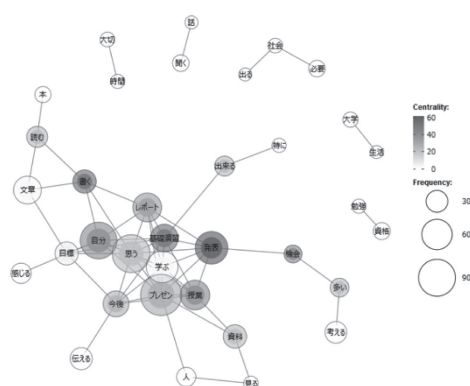


図3 基礎演習の学びに関する頻出語および共起ネットワークグラフ

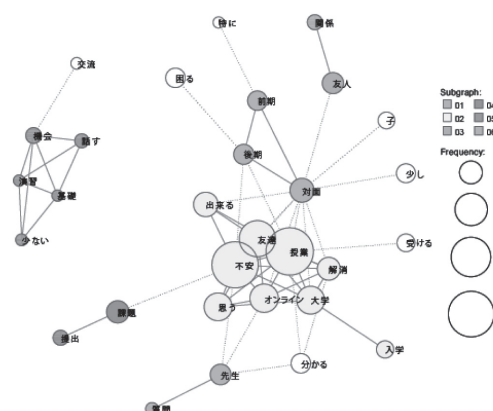


図4 1年間の不安に関する頻出語および共起ネットワークグラフ

続いて、図4は「困ったことや不安」のテキストデータを、図3と同様にKH Coderを用いて共起ネットワークとして示したものである。[図4]トピックとしては「オンライン授業全般への話題」を中心として、「課題提出」、「コミュニケーションの機会」、「友人関係」、「教員への質問」が不安の中心であることがわかる。

学びを確かなものにした学生が大半であった一方で、10月後半の授業中盤あたりから、学生の課題未提出が増加し始めた。授業内でも提出忘れに注意するようメンションがなされたが、それでも課題の未提出はその後も一定数生じていた。未提出が目立ったのは、情報機器への苦手意識を持つ学生であった。こうした学生はしばしばどこにアクセスして回答すればいいのかわからなかったり、不明なことがあっても担当教員への連絡を行わなかったりという事例が少なくなかった。残念ながら、コンピューターリテラシーや情報リテラシー能力が、各学生の学修状況に大きく影響していたようである。こうしたケースは、従来の対面授業であれば教員によりフォローアップできたこともあったかもしれないが、オンライン授業の場合はそれ自体が困難である。今後もどのような支援ができるかを考えていく必要がある。

また、LSMごとの仕様の違いは、コンピューターリテラシーに不安を抱く教員にとっても、緊張をもたらすものとなった。とくに、2020年度は、アプリケーションごとの急な仕様変更が重なった。新たな機能が追加されたことで、便利になる一方で、アプリケーションのボタン表示に変更が生じるなど、小さな変更に対応するのも、利用者が理解していないと難しいことも多かった。基礎演習では教員同士でのフォローアップができるよう、コーディネーターの配慮がなされたことで、大きなトラブルは発生しなかった。一方で、教員側の情報リテラシーもスムーズな授業運営を進める上で大きな要因となることも明らかになった。

4. 2021年度前期の初年次教育

4.1. 2021年度前期の状況

2回目の緊急事態宣言は2021年1月14日から2月7日まで実施され、その後愛知県独自の緊急事態措置が3月21日まで実施された。感染状況も、小康状態となったこともあって、2020年度入学の交流遠足を3月に実施、卒業式も開催された。

しかし、2021年5月12日より愛知県は3回目の緊急事態宣言の対象地域とされた。さらに6月20日から愛知県を含む、東京や大阪など7都道府県は、まん延防止等重点措置に移行し、2021年9月30日をもって19都道府県の緊急事態宣言及び8県のまん延防止等重点措置の全て解除し、制限を段階的に緩和された。2021年3月4日の文部科学省の「令和3年度の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について（周知）」では、2021年度の授業実施にあたって「各大学等が学生に寄り添い、例年と異なる環境の中でも、学生が安心し、また十分納得した形で学修できるような対応を講じていただくことが重要」であること「十分な感染対策を講じた上での面接授業の実施など学修者本位の教育活動の実施」とともに「新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた取組」に努めるよう周知された。とくに、「地域の感染状況等も踏まえて十分な感染対策を講じた上で、面接授業の実施について適切に取り組む」こととされた。

4.2. 2021年度前期におけるファーストイヤーゼミの実施

本学・本学科の授業は2021年4月の授業開始から、できる限り対面授業での実施が推奨された。とくに、本学のみならず、国内での大学生活に関する調査から、遠隔授業によるデメリットが注目をあつめていた。とくに初年時学生にとって大

学生生活を過ごす上で、対面授業や大学に通学し、新たな人間関係を構築する際、オンラインではそれが困難なことが広くメディアでも報じられている。

一方で、感染対策のための学内入り口や教室ごとにアルコール消毒が設置され、その後エントランスでの体温チェックシステムの導入など、状況に応じた対応が行われていた。また、飲食に利用できる教室の指定をはじめ、教室利用におけるルールが徹底された。その中には教室の試験定員（教室においては隣り合う席では1席空ける着席数）が規定されたため、大学全体が対面授業を実施する際の教室不足が危惧されていた。2021年度の対面授業を実施するにあたって、2019年までと同様の教室利用が困難であることが想定された。これまでは、個別授業で対応する教室と合同授業を実施する教室の両方を確保していたが、大人数を収容する教室の利用を避け、個別教室で対応することでの感染のリスク分散などを考慮した、授業を計画した。合同授業で利用していた大教室を解放し、図書館の利用ガイダンス、PC利用ガイダンス等の3クラスごとの合同授業は、図書館、PC教室を利用して実施した。それ以外の共通教材を利用し、各クラスで実施する授業については、教室備え付けのプロジェクトとスピーカと教員PCを接続し、Zoomを利用した複数教室配信の授業を実施した。

本学においては、2020年度に引き続きLMSの利用、とくにGoogle Classroomの利用が推奨されていた。ファーストイヤーゼミの主たるLMSを選定する際、合同クラス全体を運用と、これまでの教材の参照性も考慮し、LMSにWeb ClassとZoomを基本とした。その後、遠隔授業期間においては、ストーリーミング機能およびオンデマンド動画教材の配信のためGoogle Classroomを併用し、15回の授業を実施した。

高校生でコロナ禍を経験した2021年度入学生は、2020年度入学生とくらべ、遠隔授業の経験

もあった。2021年のゴールデンウィークまでは対面授業において、PC教室で、大学のネットワークシステムへのログイン、大学ポータルサイトの利用方法、LMSの利用方法、メールの書き方、Office系アプリケーションの操作について、学修する機会を持った。大学生としての最低限のコンピュータリテラシーを身につけた上で、遠隔授業期間に入るようになった。2020年度当初とくらべ、スムーズに遠隔授業への移行ができた。

2021年度の授業は5月中旬移行、遠隔授業での実施が継続された。実習系の授業、PCを利用する授業などは、対面での実施が可能であったが、学生の状況や要望に配慮する必要もあった。授業によっては、リアルタイムでの配信と対面授業を混合させたハイフレックス授業や、その後のオンデマンド教材の提供など、教員ごとに工夫することとなった。7月になって対面授業が再開されたが、各クラスに分かれ、共通教材を利用する授業は継続した。

2019年までの新入生と先輩学生との交流は、4月交流合宿、授業内でのプレゼンテーションで行ってきた。また2020年度は「ファーストイヤーゼミ」「基礎演習」での先輩学生が授業のゲストとして登場し、交流遠足のチューターとしてイベントの企画・運営を行い、交流する機会を設定してきた。過去にも、就職後の先輩がゲストとして話す機会を設けたこともあったが、2021年の「ファーストイヤーゼミ」では、ロールモデルとしての先輩を見せることも想定し、15回目の授業のゲストとして、就職活動を終えた4年生と放送業界で活躍している卒業生、産休中の卒業生をゲストスピーカーに迎えた。YouTubeでの動画配信教材や、Zoomを利用することで、ゲストスピーカーを招聘することがより柔軟に対応できるようになった。オンライン授業を経験し、就職活動もオンラインで行なっていた4年生にとっては、Zoomでの発表に慣れており、画面越しではあるが、4年間の学びと共に1年間のオンライン生活

の成果を見ることもできた。また、オンライン会議システムのメリットを生かし、遠距離通学をしていた4年生に対しても、リモートワーク等でZoom等の機能にも慣れてきた卒業生にも、距離、身体的状況に左右されずに依頼をすることが可能になった。勤務時間の関係上、事前にインタビューを収録した卒業生は、Zoomでの画面収録動画を利用し、YouTubeで映像資料を準備、それをリアルタイムで4年生、卒業生と共有しながら授業を進めることが可能になった。

対面授業において、実際にゲストが登場とその語りによって伝えられる全てが遠隔授業のシステムをつかって十全に行われるわけではない。しかし、受講生とゲスト及びインタープリターとしての教員が、それらを利用するスキルを確かにしているのであれば、学びの質はある程度確保されると考える。

5. 考察と検証

ここまでの初年次教育では、Zoom、Teamsとリアルタイム授業を実施してきた。当初は操作に戸惑いのあった学生たちも、2020年度では、オンラインでの学生同士の助け合い、2021年度では対面授業での授業時間内でのフォローなど、学修を進めるための基盤構築ができていた。コロナ禍という特殊な環境があってICT利用が格段に進んだ印象がある。

本学のみならず他大学においても、遠隔授業による初年次教育は実施されており、上級科目のグループワーク演習の実践報告（赤沢：2020）や、Zoomを用いたアクティブラーニングの実践報告（森平：2021）など、アクティブラーニングの実践事例がいくつも報告されている。

本学科の初年次教育においても、2019年以前からアクティブラーニングを実施してきた。2020・2021年度授業においても、アクティブラー

ニングが実施されている。2020・2021年度の「ファーストイヤーゼミ」では、学生相互のインタビュー実践やそれに基づく文章作成、プレゼンテーションは、遠隔授業・対面授業を問わず継続して実施した。2020年度「基礎演習」でのオンラインでの合同アンケート調査とその調査に基づいたプレゼンテーションを制作するグループワークなど、アクティブラーニングも遠隔・対面授業の状況に柔軟に対応しながら実施している。遠隔授業システムと対面授業の良さをそれぞれ検証しながら、さらに授業内容を改良していきたい。

学修環境を構築する上で、安定した通信環境やハードウェアの確保が重要な要素となっている。学生側のデバイスがスマートフォンのみとなっている場合、アプリケーションそのものの不具合などが生じた場合は致命的である。PCからのアクセスなど、複数のデバイスからアクセスできる環境が、遠隔授業においては有用となる。現在いずれの大学でもBYOD (Bring Your Own Device) が推奨されており、本学でもPCの購入が推奨されている。学生にとって、自らデバイスを持つことが、自分のPCスキルを身につけ、スムーズな学修環境を確保する上で必要になってくるであろう。

対面授業における遠隔システムの利用に関しては、映像共有、音声共有など、事前準備をおこなっていても、不具合が生じる事案が起こった。安定した通信環境を得ること、ハードウェアの設置に想定以上に時間がかかることもしばしばあった。とくに、TSやSAなどの授業運営スタッフを準備しておらず、教員間で問題に対応していた。技術的な人材のサポートがあれば、よりスムーズな運営が可能であったと考える。

本論で取り上げた2020・2021年以前から授業にLMSを利用していたレガシーがあり、教員側も最低限の利用知識をもって遠隔授業へのスムーズ移行が可能であった。初年時学生も、2020年度は全員がほぼ未経験のままで対応することに

なったが、2021年度は、高校でのオンライン授業を経験もあり、システムは違っていても、多くの学生は柔軟に対応しながら授業を進めることが可能であった。

その一方で、それでもオンライン対応が難しい学生が一定の割合で存在している。対面授業においても、技術的な学修支援は、大学の学びを保証する上で重要だが、オンラインにおける学修支援をどのように行うかは、この先も課題となるだろう。岩崎が指摘しているように、大学の授業におけるTA、LAが配置されることで授業運営の大きな助けとなり、学修環境の充実につながるのではないかと(岩崎 2021)。

また、大学教員側の情報リテラシーのアップデートと学生の遠隔授業への柔軟な対応は、大学の授業においてのみならず、テレワークなど場所や物に縛られないSociety5.0社会の構築に必要なスキルとなる。より学びとその環境を確保する上で、これらは欠かせないものである。

ここまでコロナ禍での学びを保証する上で、やむなく対応せざるを得なかった、2020年度は、オンデマンド型遠隔授業、リアルタイム遠隔授業、対面授業、その両方に取り組むハイフレックス授業など多様な授業形式が開発されてきた。対面授業が期待された、2021年度前期においても、遠隔授業の実施を織り込みながら授業を実施してきたことを振り返った。この先も、感染状況によって、柔軟に対応する必要があり、これまでの経験と蓄積により、ハードウェア・ソフトウェア次第に改良されていくであろう。これと同時に、大学生の学びの多様性に対応できる柔軟な学修環境づくりに取り組んでいきたい。

注

- 1) なお、2020年度前期、後期と続く1年生必修の語学の授業に、英語と中国語がある。英語のクラスは週3回の授業実施であり、英語のみ独自の授業時間とシステム運用がなされていたため、LMSはGoogle Classroomを利用し、リアルタイム双方向授業ではZoomで実施された。

中国語ではGoogle ClassroomとMeetの組み合わせをはじめ、担当教員によって利用するシステムが異なっていた。学生もこうした多様な状況に対応しつつ授業を受講していた。2020年度後期も語学は同様の状況が継続されていた。

実施と新型コロナウイルス感染症への対策に係る留意事項について（周知）」https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt_kouhou01-000004520-02.pdf
文部科学省 高大接続システム改革会議（2016）「最終報告」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf

引用・参考文献

- 赤澤紀子 2020「遠隔授業による大学初年次教育と上級科目のグループワーク演習実践報告」『情報教育シンポジウム論文集』2020、pp. 256-258
- 岩崎千晶 2021「高等教育におけるオンライン授業の設計」『関西大学高等教育研究』12 pp. 139-147
- 内田知宏・黒沢泰 2021「コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業」『心理学研究』
- 亀井美穂子・宮下十有・木田勇輔・福安真奈・脇田泰子 2021「コロナ禍での初年次教育における新入生支援とその課題」『文化情報学部紀要』20 pp. 13-22
- 中央教育審議会 2008「学士課程教育の構築に向けて（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
- 仲川浩世 2020「オンライン授業における大学初年次教育：学習者の気づきを促して」『大阪女学院大学紀要』50 pp. 167-181
- 西出弓枝、浦上萌、安立奈歩、加藤容子、三井悦子、山口雅史、増井透、三浦隆宏、山根一郎 2021「遠隔授業を契機とした取り組みと成果」『椋山女学園大学研究論集』社会科学篇52 pp. 29-41
- 藤原俊幸、陳慶光、矢野俊幸、松永雅弘、松本欣也、東出朋、高橋憲司、幸山智子、中村尚生、ヴィラーグ ヴィクトル、小田和人、藤井俊輔、田中啓太郎、藤木司、久保隆司、池山剛、飯沼慶介、劉卿美、橋本優花里、橋本健夫 2020「遠隔教育の実施と大学での教育に関する一考察—建学の精神を伝える授業のオンラインでの実施をもとに—」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』4 pp. 1-17
- 村田晋也、仲道雅輝、竹中喜一、中井俊樹、小林直人 2021「初年次教育科目における遠隔授業実施支援の取り組み—「新入生セミナー A」 オンラインコンテンツの提供—」『大学教育実践ジャーナル』19 pp. 141-146
- 森平直子（2021）「zoomを用いたアクティブ・ラーニングによる初年次教育（基礎ゼミ）の授業例（特集「コロナ禍の中での人間社会学部の教育：の授業は「不要不急」なのか？」）」『人間社会大学研究』（18）、pp.41-43
- 文部科学省（2020a）「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について＊令和2年5月12日時点」
- 文部科学省（2020b）「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について」
- 文部科学省（2021a）「令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等について」＊調査期間：令和3年3月19日～3月31日
- 文部科学省（2021b）「令和3年度の大学等における授業の

みやした・とあり / 文化情報学部准教授

E-mail : toarim@sugiyama-u.ac.jp

きだ・ゆうすけ / 文化情報学部准教授

E-mail : kidayusuke@sugiyama-u.ac.jp